

Lib.

京都産業大学図書館報
v.25, no.1 (Apr. 1, 1998)



本学所蔵 賀茂葵祭行装ノ図より (<http://www.lib.kyoto-su.ac.jp/>)

地球温暖化防止京都会議の意義	須藤 眞志	1
「いちばん静かな」映画	吉田 眸	3
疲れたときに聴く CD	竹内 茂夫	3
「ふんによう博士一代記」	牧田 陽介	4
図書館からのお知らせ		4

地球温暖化防止京都会議の意義

須藤 眞志

このままの状態で行けば地球は徐々に平均気温が上昇して、やがて 2005 年には今より約 2 度以上、上昇するとされている。そうなれば南極や北極の氷が溶けだして、1 メートル以上も海面が上昇するのではないかとの予測もある。小島地域の幾つかでは海面下に没するところも出てくる恐れがある。また地球全体の生態系が変わり、大きな気候変動が起こり、洪水や旱魃によって食料の生産にも大きな影響が起こり、また疫病に悩まされることになるであろうとされている。

専門家の会議でもこのまま今後何らの処置もとらなければ、1990 年より少なくとも毎年 0.3 度づつ気温が上昇していく計算になると警告された。その原因の大部分は地球を暖める温室効果ガスの影響である。とくに重要なのは二酸化炭素である。そのほかにも酸化窒素、一酸化炭素、浮遊粒子物質、光化学オキシダント等汚染の原因となるものは沢山ある。

最初の環境と開発に関する国連会議いわゆるサミットが 1992 年 6 月 3 日から 14 日までブラジルのリオデジャネイロで開催された。これには 170 か国の政府国際機関が参加し、地球規模での環境破壊に対して国際的規模でいかに協力していくかを討議した首脳会議であった。残念ながら当時の日本の宮沢首相は出席せず、各国のひんしゅくをかかった。ここでリオデジャネイロ宣言が出され、気候変動に関する条約が締結された。またアジェンダ 21 が採択され、各国とも今後地球環境の保護のために協力

することが確認された。なかでも重要なのは先進国による大気汚染等の環境破壊をいかに防ぐかということであり、我が国の役割も強調された。

また途上国に対しては、先進国が資金や技術の面でいかに援助していくかが議題として国際社会に残されたのである。これから工業化していく途上国にとって、排出ガスの厳しい規制は経済発展にとって重大な問題であった。先進国がすでにクリアした問題も途上国にとっては大きな経済負担となり、それだけ投資に向ける資金が不足する可能性があったからである。また、技術的にも先進国からパテントを購入せざるを得ず、その資金も莫大であった。自らの国家で排出ガス防止のための技術を独自に開発することは一層困難なことであった。だからといって途上国だけ野放しには出来ないのである。京都会議の背景にはこのようなことがあった。

今回の京都会議には、155 の国家及び国際機関並びに 9000 人に及ぶ NGO の人たちが参加した。そこで約 10 日間に渡り熱心な討議がくり広げられたが、肝心の日本政府は今一つ熱意に欠けていたのではないかという批判が一部にあった。たとえば橋本首相は京都に 1 時間しか滞在せず、その大部分はゴア副大統領との会見に費やした。また当初日本の通産省が呈示したに CO₂ (二酸化炭素) の削減率は大変に低いもので、無責任だと各国のひんしゅくをかかった。一方アメリカも削減ゼロを最初主張して身勝手だとの批判を浴びた。

地球環境の問題を国際政治的にみると、そこにはまた異なった難しさがある。国家間には経済的な格差と工業レベルの違いが大きいからである。また環境問題に対する熱意や切実感にも差がある。オーストラリアやカナダのような人口の希薄な国家と日本のような場合では事情が異なるのはいたしかたない。国際社会には財政的に豊かな国とそうでない国があることもしかたがないことである。あまり規制を厳しくすると経済発展に大きな問題が生じる国と、経済成長よりも自然な状態をなによりも大切にしようとしている人たちの間では、同じ問題でも取組方に相違がでてくるのは当然である。国際政治はそのような場合いかに調和を計り、エゴイズムを排除していくかが難しいのである。

排出物によっては比較的規制のし易いものとし難いものもある。しかし、地球の温暖化はいかにしても阻止し、かけがえのない地球をどうしても子孫に渡さなければならないのである。とくに大気汚染には国境はなく、地球全体で協力しなければ解決出来ない問題なのである。そのために国際ルールが是非必要なことは誰の目にも明らかなのである。今回の京都会議でも、各国の利害の差が大きな問題となった。また、多くのNGOのなかには極端な理想論を唱える人たちも多くおり調整が難航した。事務局をあずかった人たちの苦勞は大変なものであったと想像される。

10日間にわたり白熱した論議がおこなわれ、会場の外でもNGOのアップールの運動などが盛んに行われた結果、地球の温室効果を生じる排気物の削減目標がつぎのように決まった。第一期約束期間として2008年から2012年の間に、1990年の排出基準から日本は6%の削減数値目標を約束した。現状維持を主張していたアメリカが7%を約束したことが事態を一挙にすすめることになった。京都会議はマスコミの関心も当初からかなりあり、会議の内容が詳細に報告されたが、問題の性質上技術論が非常に多く、化学的知識や数字に弱い人には十分に理解できなかったところがあったのではないかと思える。

最終日に京都宣言が出されたが、それは環境問題がいかに技術論的に困難なことであるかを如実に示している。また市民参加の重要性もうたわれたが、いかにして市民が参加し得るのかまた貢献できるのかこれまた難しい問題であった。新聞の投書欄などにも、一般市民としてどのようなことができるかといった内容のものが掲載されていたが、冷房や暖房を節約すればよいとか、また不必要な自動車の利用を避けるかなど常識的な議論は比較的容易でも、さて実行となるとなかなか大変であることが分かった。

京都会議がいかに国際的であったかは、浅岡事務局長も「アジア、アフリカ、南太平洋、東ヨーロッパからの35人の多彩な方々と出会うことができました。また、この地球に実に様々な暮らしがあり、どこでも環境を守る

人々の活動があることをまなぶことができました。」と書いている。現在国家的な規模では国連が世界の中心的な役割を果たしているが、たとえ少数であっても、多くのNGOの熱意も世界を動かすことになることも証明された。今後も一般市民やNGOの協力を軽んじてはいけない。

1995年の第一回ベルリン会議から今回は第三回目であるが、今後ともこのような国際会議は続くであろう。国際政治のうえでも、戦争や紛争のような破壊だけでなく、一見平和的な経済活動が実はかけがえのない地球を破壊しており、それは全地球の問題として考えなければならぬことをしめした。今回の会議でもまだ地球には海や大地に汚染を吸収する自浄能力があるが、これを全体のなかでどのように計算するかが議題となった。これをいかに保持し高めるかも大きな問題であった。地球のもつ自浄能力が死滅すれば汚染は全く回復しないことになるからである。また会議ではこの自浄能力を削減計画にいかに取り入れるかで大論議となった。つまりある国は自浄能力を計算して、汚染物質の増加をマイナスできると主張したのである。しかしそれでは削減の努力はまったくなされないことになってしまう。そこでまず削減の努力を第一の目標に掲げようということでは一致した。

またある国からは目標以上の削減に成功したら、その分を他国に売ることができるという案も出された。つまり地球全体で削減目標に達すればよいではないかということである。しかしそれでは、金持ちの国はいつも多くの排出物を出せることになってしまうという不公平が生じる。技術的なことは複雑な側面が多かったのである。日本はともかく6%の枠を約束したのあるからこれから来世紀に向かって民間産業も政府機関もまた一般市民も一段の努力をしなければならない。

京都と付いた宣言が出されたことに対し大変に意義深いものを感じる。京都宣言は一種の国際条約であり、罰則規定はついていないが、約束が履行できないときには世界的な信用を失うことになり、やがてなんらかの制裁処置をとろうという意見が出てくるにちがいない。日本も含めCO₂の削減目標値はまだ先のことであるが、少しずつ毎年努力していかなければ目標が達成できないことは当然のことである。

地球の温暖化は地球の生態系を変えるだけでなく、人間の身体生命にも重要な影響をもたらす問題であり、すでにアフリカや南西アジアでは砂漠化が進行し、またこれまで確認されていなかったようなウイルスも見つまっている。また多くの動植物の種が絶滅しているのも事実である。これらは一刻の猶予もなく行動することを我々に示している。京都会議の意義もそこにあろう。

(すどう しんじ 外国語学部教員)

「いちばん静かな」映画

吉田 眸

北野武の『HANA-BI』論をやってみようと、満員(ほとんどが学生)の映画館に駆けつけたのはいいが、どうもやはり血だらけの映画なのが(とうぜん予想はしていたが…しかしあの『ソナチネ』はよかった)ちょっと性に合わず、まあとりあえず、映画のなかのあの富士山は凄味のある美しさだったなあ、と言っておこう。

『HANA-BI』論の予定が変更で、急きょ『あの夏、いちばん静かな海』論となる。これはまたどんな暴力からも、どんな舌戦からも遠く離れた「いちばん静かな」映画なのだが、北野武の実力を知るのには適している。映画の「力」を暴力という題材から借りるなどということがもしあれば最悪であろうし、北野監督がまさか、キレまくり殺しまくるピートたけしの役に内側から共感しているはずもないだろう。が、弛緩状態にあるように見える人物(たけし)が突如狂暴な行為に「無媒介的に」転ずるというワン・パターンのスペクタクルは、北野映画のほんとうの力を見えなくしてしまう。

さて、「いちばん静かな」映画は、サーフィンをする主人公とそれを見守る恋人(後者の存在がとりわけ素晴らしい)、そして海、というのをひたすら淡々と映し出すだ



けである。撮り方はきわめて単純に、構図/逆構図、つまり海に向かうショットと海の側からのショットのモニター。そして、間(ま)。人が映り、そのまま間(ま)があるというリズム。それだけで見せる。主役の二人に台詞はなく、脇の人物たちの声がノイズのように入るだけという極端な試みなのに、まったく退屈はさせないというのが、なんととっても凄いところだ。

キタノ・ブルーがいい、と人は言う。この監督が偏愛する海のショット(とうぜん『HANA-BI』も海辺で終わらなければならなかった)は、私見によれば、その色もさる

ことながら水平線を、つまり横の線を見せられている。「いちばん静かな」映画は、水平線だけでは足りずに、まさに横の線だらけ、「いちばん横の線の多い」映画なのだ。そして、横に向かって歩む人物に連動して横移動するカメラというのもしつに頻繁に

ある。こういう撮り方から生まれる遊戯的で平面的な画面は、奥行と消失点のある遠近法的な視の構成とはまったく異質であり、したがってたとえば心理描写が希薄(行為は突発的・無媒介的)であり、この辺が北野映画の可能性の中心である。

かつて鬼才山中貞雄は「刀を抜かない時代劇」で知られていたが、北野武にはひとつ「暴力なき暴力映画」というほんとうの意味で恐ろしいのを撮ってもらいたい。

(よしだ ひとみ 外国語教育研究センター教員)

疲れたときに聴くCD フォーレ:「レクイエム」作品 48

竹内 茂夫

昨年フジ系列で放送された三上博史主演のテレビドラマ「それが答えだ!」の中で、湖のほとりの「律子の恋のお葬式」の場面でこの曲の第5曲目「神の子羊(アニュス・デイ)」が流れ、とても印象的だった(もっともその楽器編成ではあの音は鳴らないぞ!と思ったけれども)。

「レクイエム」とはカトリックの「死者のためのミサ」の一形式の俗称で、モーツァルト、ケルビーニ、ベルリオーズ、ヴェルディの曲がよく知られている。フォーレはレクイエムの形式にのっとりながらも、通常第2曲目で最後の審判への恐怖を劇的に描く「怒りの日(ディエス・イレ)」を省き、第4曲目を「ああイエスよ(ビエ・イエス)」に換え、終曲に安らぎに満ちた聖歌「楽園にて(イン・パラディスム)」を追加している。最近のヒーリング(癒しの)・ミュージックのブームの中、緩やかで静か目の合唱または独唱(ソプラノ、バリトン)を小編成のオーケストラとオルガンが中音域を中心に支えるこの曲はよく聴かれているようである。

フォーレは、1885年夏に父を亡くしたことを記念してこの曲に取り組み始めたと言われる(異説もある)。1887年の大晦日に母も亡くした後には一気に曲をまとめ、ほぼ半月後の1888年1月16日には早くもパリで初演された。その後二度改訂されて、1893年に初演された第2版と1900

年に初演された今日よく聴かれる第3版がある。

毎年夙川カトリック教会において「阪神大震災メモリアルコンサート」が催され、この曲が演奏されている。去る1月15日、三周年目のコンサートを聴きに行った(延原武春指揮テレマン室内管弦楽団他。曲目は他にペルゴレージの「スターバト・マーテル」)。氷雨の降る中にも関わらず教会には立ち見が出るほどで、終曲の「楽園にて」では涙を流す楽団員たちもいる中、自らも被災されたであろう楽団員や聴衆の方々の悲しみが癒されることを願いながら、昨今の行政の有り様を思う時に震災は決してまだ終わっていないという思いを新たにした。

お薦めのCDとして、「それが答えだ!」でも使われたクリュイタンス指揮パリ音楽院管弦楽団他(東芝EMI TOCE-3067)と管楽器を入れない独自の版を用いたサマーリー指揮スコラ・カントルム・オヴ・オックスフォード他(NAXOS 8.550765)を挙げておこう。図書館には、デュトワ指揮モントリオール交響楽団他とフルネ指揮スイス音楽祭管弦楽団他のCDがあり、前者は非常に美しい演奏で後者はライブならではの熱のこもった演奏である。疲れや悲しみを覚えるときに歌詞を味わいながら聴く一曲として、クラシック派でない人にもぜひお薦めしたい。

(たけうち しげお 外国語学部教員)

辺見庸氏の作品に「もの食う人々」(共同通信社)というものがああります。さまざまな国の食文化を描いたこの作品は、とにかく食べる、その国の人と一緒に食べるというものです。

人はものを食べます、その次はどうしますか。そう、出します。排泄という行為です。今回紹介する「ふんにょう博士一代記」(論創社)はその排泄物に焦点を当て、研究に取り組んだ中村浩博士のユーモアの溢れる文章で書かれた自伝であり、またウンチクの詰まったエッセイ集でもあります。

中村博士は子供のころ、肥溜めに落ちてフン死しかけたことから糞尿に興味を持ち始めました。そして、父親に買ってもらった顕微鏡で自分の糞を覗いていたなどのエピソードから始まります。

戦争中には糞からガスを取り出す研究を行ったり、尿から塩を取り出す方法を開発、そしてその塩を用いて料理を作り試食会を開催、それを食べた当時の総理大臣は博士に握手を求めて来て絶賛したとか。ただ、尿からできた塩とは言わなかったらしいけど。

この中村博士、昭和36年には、科学技術庁から宇宙空間での尿尿処理、食糧の生産方法の研究をするよう命じ

られ、クロレラ培養の技術を確立します。また、NASA(アメリカ航空宇宙局)からも呼びがかかり、アリゾナ砂漠で3ヶ月間、自給自足の生活をする実験を行いました。この実験、糞をもとにクロレラを培養し、ついでミジンコや小魚、ネズミを飼育して食糧を生産して生活をしていくというものです。3ヶ月後、博士は「糞尿がある限り、人間は飢えない」という信念を得たと言っています。

「地球の資源のすべてはやがて枯渇する。人類は今こそ枯渇しない資源に目を転ずべきではないか。微生物食糧は無限にこれを生産することができる。糞尿は人類の未来を約束する貴重な資源なのである」

糞尿から地球や人類を語る。そんなこの本はクソ真面目な1冊です。

1980年に亡くなられた中村博士、本当はクロレラ研究の第一人者だったそうです。その研究過程で糞尿についても研究するようになり、「ふんにょう博士」と呼ばれるようになったようです。本の題名にするほどだから、本人もそう呼ばれることが嫌いではなかったのでしょうか。

(まきた ようすけ 経済学部4回生)

いんぷおめーしょん

利用案内

開館時間

平日 8:30~20:00

土曜日 8:30~16:30

授業休業日 8:45~16:30

定期試験前・期間中の日・祝日
9:30~17:00

視聴覚室の開室時間

平日 8:45~19:00(受付は、16:30まで)

土曜日 8:45~15:00(受付は、11:45まで)

第2・4土曜日は、休室です。

休館日

日・祝日、月末作業日、授業休業期間中の一定期間等

日曜・祝日開館のお知らせ

前期定期試験に備え6月7日~7月26日の日・祝日は、開館します。

夏期休暇中の図書館利用について

8月1日~9月22日まで夏期休暇期間となります。それに伴い、夏期休暇貸出を7月17日(金)から開始します。

詳しくは、館内掲示、図書館のホームページ、またはライブラリーカレンダーをご覧ください。

ライブラリー・ガイダンス実施中

図書館では、毎年、4月~7月の館内はライブラリー・ガイダンス一色に染まります。どの時間も、ガイダンスを受けるグループと説明している係員が、そこに集まっているのをご覧になれるでしょう。

プログラムは次のようになっています。

新入生のためには本学の蔵書目録の使い方、利用できる様々な施設・資料・情報の説明、くまなく館内をお見せするツアーなどでちょうど授業1時限分です。

今年は英語のクラス単位で実施します。英語の先生に、「私たちのはいつですか」とお尋ねください。

ゼミなどのクラス単位でもお受けしています。ゼミの内容に合わせ、オンラインデータベースやCD-ROM、webサイトなどを使って、情報の効率よい探し方、役に立つ資料の紹介や入手方法のレクチャーがあり、実際に体験もしていただけます。

担当の先生にご案内を差し上げています。

めざせ、図書館の達人!知っているのと知らないのとでは、大変な違いです。その後の人生(!)を変えるかも。

(参考係)

発行所 京都産業大学図書館
〒603-8555 京都市北区上賀茂本山
(075)701-2151(代)